

「私の問い」を立ててつながる国語科授業

竹中奈月・長崎県時津町立時津東小学校教諭



「その『めあて』は、学級の子どもたち一人一人が解決したいと思う『めあて』になつていますか」その言葉を聞いて、はっとした。今まで、私は自分がかじめ考えておいた「めあて」からそれないように、子どもたちのつぶやきを都合良く拾って板書し、満足していたからだ。学級の中には、置き去りになった子どももいれば、物足りなさを感じた子どももいただろう。では、どうすれば子どもたち一人一人が「解決したい！」と思いい、主体的に学び始めるのか。

「答えの文」を見つけさせる

第1学年1学期の国語科で「きつつき」という教材文を使い、文中の「問いの文」と「答えの文」を見つけることができるようになる学習を行った。第1時では、1年生の子どもたちが、この単元で身に付ける力を自覚できるように「問いの文」と「答えの文」を見つけることができるようになる学習をするということを、何度も確認した。そして、範読をし、きつつき、おうむ、はちどりの動画を見せて、第1時は終わった。

第2時でも、初めに「この単元で何ができるよ

うになるの？」と問い、「問いの文」と「答えの文」を見つけることができるようになる学習をするんだということを再確認した。その上で「この時間、どんなことを調べたい？」と尋ねると①はちどりの「問いの文」と「答えの文」はどこかな②おうむのくちばしは、どうして曲がっているのかな③きつつきの「問いの文」と「答えの文」はどこかな④なぜ、くちばしの形が鳥ごとに違うのかな⑤どうして、はちどりは花の蜜を吸うのかな⑥どのくちばしが、どの鳥なのかな——と言った意見が出された。6歳児と云えど、自分が解決したい問い(私の問い)を自然に立てていることに驚き、感心した。「問い」を立てることが難しくかった子どもたちには、友達の「問い」の中から選ぶよう促した。こうして29人全員が、解決したい「私の問い」を立てて学習に入った。

ここで注意したいのは「問い」の善しあしだ。①と③の「問い」を立てた子どもたちは、この「問い」を解決することが、この単元で身に付けさせたい力に直結する。しかし、②④⑥は直結しない。さらに、⑤の「問い」の答えは、教科書の本文には載っていない。どれだけ一生懸命読んでも、解決できないのだ。このように、子どもたちの「問い」を教師が分析し、把握しておくことで、次の時間の教師の出番が見えてくる。

「問い」を立てた後、「あなたは、今からどこを読めば解決できそう？」と尋ねると、それぞれに「きつつきのところ！」や「はちどりのところ！」「○○さんは全部読まないでだね！」などといった答えが返ってきた。一人読みをし、悩んだら友達に尋ねたり全体で話し合ったりすることを繰り返すうちに「問いの文は、クイズみたいな文を見つけるといいよ」や「答えの文は、問いの文と続けて読んだときに、ぴったり合う文だよ」といった声が聞かれるようになった。また、⑤の「問い」の答えは、文のどこにも書いていないので、教科書では解決できない「問い」もあることを、みんなで確認できた。②④⑥の「問い」の解決も、内容を詳しく捉えることに大いに役立った。

単元の終わりには「きつつき」と同様、3種類の帽子の説明文を教師が作り「問いの文」と「答えの文」を見つけて線を引るかどうかを確かめる「しけん」を行った。ただ、3種類目の消防士の帽子の説明で、「問いの文」の次に「答えの文」ではなく、問に説明の文を挟んでみた。結果は、29人中、20人が正しく線を引けていた。間違えた9人は、やはり3種類目で引つ掛かった。

課題は残るが、子どもたちが主体的に学び始めるために、「私の問い」を立てることは有効だった。これからも、一人一人の「問い」を大事にし、対話を通してつながっていく授業を目指したい。